

S-II-1

女性の腹証と内分泌環境

大阪医科大学産婦人科学教室

○後山尚久

【目的】漢方医学においては身体のいくつかのサインを捉えた「証」の決定がその診療の基本となる。中でも部分「証」のひとつであり、日本漢方の診療の柱のひとつである腹証は、方剤決定の大きな指標である。そこで、今回われわれは月経周期異常、機能性不妊症、月経前緊張症、更年期障害などの女性の機能疾患の腹証と内分泌環境の関連につき検討し、腹証の客観化の可能性について考察した。

【方法】月経周期異常109例、女性不妊症117例、広義の更年期障害280例を対象とした。これら全員に漢方四診による八綱弁証を用いた「証」の決定を行い、腹証所見を観察した。内分泌検査として下垂体性ゴナドトロピン (FSH, LH)、エストラジオール、コルチゾール値をそれぞれの研究目的にそって測定した。月経周期異常例には西洋医学の見地から「温経湯」を投与し、その反応性と腹証を比較した。更年期障害における胸脇苦満、腹皮拘急、小腹急結、あるいは臍下不仁と種々のホルモン値を比較検討した。

【成績と考察】月経異常患者において温経湯の有効性はいずれの証においても同等であった。不妊症の腹力については中等度緊満～微満症例の妊娠率が高く、また胸脇苦満と小腹硬満の認められた症例の妊娠率が高い傾向が認められた。臍上悸は妊娠例ではわずか(6.8%)に認められたにすぎなかったが、非妊娠例では27.4%も観察された ($P<0.01$)。更年期不定愁訴例において腹皮拘急の認められた例 ($12.0\pm 5.2\mu\text{g/dl}$) では認められなかった例 ($8.75\pm 4.2\mu\text{g/dl}$) に比べ、有意に ($P=0.028$) 血中コルチゾール濃度が高く、またその腹証の明瞭さとコルチゾール濃度が相関した。漢方医学の見地から、個人には体質、病期、病態をあらわす「証」があり、内分泌学的背景にも関与し、さらに薬効にも影響を及ぼすことは十分に可能性がある。したがって、胸脇苦満、小腹硬満が妊娠を妨げる何らかの病態を表わし、腹皮拘急が不定愁訴の発症に結びつく身体ストレスレベルを反映する可能性が示唆された。

【結論】漢方医学的身体所見をあらわす「証」、特に腹証からは内分泌環境や自律神経状態を反映する情報が得られる可能性があり、治療において重要な指標となると考えられるが、個人により例外も多く、随証治之の本来の意味を考慮した今後の詳細な検討が必要であると思われる。